

琉球大学学術リポジトリ

空虚な書物

メタデータ	言語: ja 出版者: 国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2022-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ホセ, マリア・メリーノ, 鈴木, 正士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017905

空虚な書物

ホセ・マリア・メリーノ著

鈴木正士訳

その夏はひどい猛暑で、日が沈んでも気温は下がらず、寝苦しい夜がづづいていた。金曜日の午前9時35分のことである。すでに太陽は容赦なく照りつけ、日陰に入ってもたいして涼しくはない。男がひとり、大声をあげながら書店に飛び込んできた。人目を引くパジャマ姿で、髪の毛は寝起きのまま、ひげも剃っていない。しかしレジにいたイグナシオは、その男を見るなり、マデラ通りの大邸宅の主人だとわかった。男は、普段地味なスーツを着て毎週この書店にやって来ては、ほとんどしゃべらず、素っ気ない態度で多くの本を立ち読みし、そのうち何冊かを買っていった。没落した貴族の末裔^{まつえい}らしかった。男はヘスス以外の店員に應對されるのを好まなかった。本に関するのではなく、まるでないしょ話でもするかのように、ひそやかにいつもヘススに話しかけた。

男の発する声が聞こえたとき、専門書コーナーにいた客たちは、どこかの酔っ払いが店に入ってきたと思った。レジのあたりに注意を向けると、その声のはっきり聞き取れた。男は、窮状にあるひとのような態度で、小説がほしかったんだ、小説が必要なんだ、と言っていた。

せっぱつまったそんな訴えなどありふれたことだといわんばかりに、イグナシオは平然と應對した。

「小説ですか？ これがちょうど本日到着分です」と言いながら、新刊書の棚から一冊抜き取り、男に手渡した。

男はその本を開くと、大きな声で音読しはじめた。それは、でたらめになる讚美歌のようだった。

「これは小説だ」その本をしばらく読んだあと、視線を上げながら男は叫ん

だ。瞳は希望に輝いていた。

「もちろん小説です」とヘススが言った。「批評家によれば、とてもおもしろい小説だそうです」

男は信じられないというかのように頭を振った。

『失われた時を求めて』第一巻と『ドン・キホーテ』を見せてもらえますか？」と男は言った。

イグナシオとホセ・アントニオはなにも答えなかったが、好奇心が刺激されたにちがいない。素早く本棚に向かうと、男が言った本を見つけてきた。男は、持っていた本をカウンターの上に置くと、二冊のうち一冊を開き、もどかしげにページを繰った。さがしていたものが見つかったようで、興奮した声をあげると、今度は小さな声でしばらく読んでいた。それからその本を閉じ、もう一冊の方を取ると、いっそう満足気にページをめくっていたが、しまいには笑いだした。

「たしかにそうだ」と男は言った。「たしかに、これは小説だ」

笑い声のなかに先ほどまでの不安や恐怖の声音は溶解したかのようにだった。そして新刊書を一冊一冊抜き取りながら、まるでなにかを確認するかのようには男は本を見ていったが、書店にいた客たちの熱い視線に気づくと、疲れたまなざしを彼らに向け、座りたい、と言った。

「気分が悪い」

男はコンピューター室に連れていかれると、椅子に座らされた。その部屋には、本の詰まった段ボール箱が所狭しと、置かれていた。

「ご気分はどうですか？」しばらくしてアルフォンソが男に尋ねた。

「ずいぶん良くなりました」と男は答えると、ため息をついた。「最悪の状態は切り抜けました。この一日ひどく異常な状況にいたのです」

「そうですか」とマリーサは言った。「お元気になられてよかったわ」

「あの、いいですか」と男は言った。その声には毅然とした決意のようなものが感じられた。「座って、聞いてくれませんか。みなさんも聞いてください。わたしは今、悪夢としか言いようのない事件の現場から逃げ出してきたところなのです。もちろん、その事件は夢ではなかったのですが」

「お客さんは事故にあわれたと聞いていましたが」とヘススは言った。

「そうです。しかし、あの恐ろしい事件が起こったのは、きのうのことです。皮肉なことに、嫌な思い出ばかりの病院を退院できるというので、きのうは朝から、晴れ晴れとした気分でした」と男は言い、もう一度ため息をつくと、話をつづけた。

「事故にあったわたしは即入院、手術を繰り返^{さいな}し、夜は苦痛に苛まれながら、ほぼ3か月のあいだ病院で療養に励みました。長いあいだ顔を見せなかったのはそういうわけです。そして針や管を身体にさしたまま、やっときのう退院できたのです。わが家で目覚めたとき、健康のありがたさをしみじみ感じました。前日までいた病院の個室にいないことに最初戸惑いましたが、すぐに、なつかしい自分の部屋やなじんでいたものに喜びを新たにしました。部屋にあるベネチア製の小さな鏡や、光や騒音をさえぎるカーテンや、古い聖画像や温度計などに気分がやわらぎ、体調も良く、心が安らぎました。皆さんのなかでこんな体験をした方はいないと思いますが」

「死ぬほど痛む虫歯を抜いた翌朝、すっきりしたいいい気持ちで目を覚ましたことだったらありますよ」と客のひとりが口をはさんだ。

からかい半分のその言い草も、自分の言葉に強い信念をいづく男には通じなかった。男は、なにを言われているのかわからないといった、ぼんやりした顔つきで視線をあげたが、すぐにまた話をはじめた。

「しかし少年時代の病後に感じたような気だるさはつづいていました。汗で湿ったシーツは取り換えられたばかりで、もう熱もなく、薄闇のなか、日常生活のごくありふれた物音をぼんやりと聞いていました。コップの触れ合う音やドアの軋^{きし}む音や遠くの廊下を掃くほうきの音など、宇宙のハーモニーとでも言ったらいよいような、かすかな物音です。その時出し抜けに、《頬のような枕》という比喩をわたしは思い出しました。《頬のような枕》という比喩、みなさんにご存知だと思います。あの小説をお読みなら覚えていないはずはありません。わたしはただ、自分の興味のままに、その比喩の出典を思い出そうとしました。そして、頬のような枕の感触とはどんなものか、思いをめぐらしまし

た。ある本を思い出すと、幼い頃、扁桃炎やインフルエンザが^{なお}治りかかった数日間の出来事が、脳裏に鮮明によみがえってきました。高熱を發し汗を大量にかき、やっと元気になったとき、せいぜい2、3日でしたが、ごほうびとして、ベッドでレモネードを飲むことと読書が許されました。わたしは、当時大好きだった『千一夜物語』と『子供のための黄金の書』を母にリクエストしました。『子供のための黄金の書』は今でも出版されていますか？

アルフォンソは肩をすぼめ、たぶん出版されていないと思うが、お望みならパソコンで検索してみよう、と言った。この受け答えに男はびくっとした。彼の問いかけはつい口をついて出たその場かぎりの言葉だったようだ。すぐに放心したような目つきにもどると、話をつづけた。

『子供のための黄金の書』や『ユニベルシタス』などの百科事典には物語がたくさん掲載されていました。そのひとつがジークフリートの物語です。ジークフリートの物語には、いつまで見ても見飽きない挿絵がついていました。水を飲もうと前かがみになり、泉に手を伸ばす主人公、英雄ジークフリート。背後の岩の上から裏切り者ハゲネが、槍を片手に、ジークフリート唯一の急所を示す洋服のかがり目がけて、命を奪おうとしている。その挿絵にわたしは引き込まれたものでした。避けられない死が迫っているが宙ぶらりんの状態。それはまるで、矛盾そのものの人間の宿命のようでした」

男は黙り込んだ。おそらく、記憶が呼び覚ました挿絵で胸が一杯になったのだろう。聞いていた客たちはざわつきはじめた。マリーサが立ち上がると、客のひとりが彼女からタバコをもらおうとした。その時男は両手を上げて、静かにしてくれと言った。聴衆が静かになると、男はまた話しだした。

「何冊かの本が脳裏をよぎったあと、とうとうある地名が^{ひらめ}閃きました。コンブレです」

男は立ち上がると、客たちをじっと見つめた。そして彼らの気を引こうと、ぴんと立てた右手の人差し指を動かしながら話した。

「作者であるプルーストが《頬のような枕》について語るのは、幼年時代のうたた寝を思い出したときです。その場面を思い出したわたしは、枕を子供の頬と^{たと}譬えたのはプルーストのはずだと考えたのです。しかし自信はありませんで

した。今ならはっきりと断言できます。先ほど確認できたからです。でもその時は記憶違いかもしれないと思い、日頃なにごとにも億劫なわたしが、すばやくベッドから起き上がると、その比喩の出典についてははっきりさせようと、本を探しに行きました」

男はいすに座ると、最初のヤマ場を迎えた物語の語り手のように、声を落とした。

「白い無機質な病室で何カ月も過ごしたあと、家にもどったわたしを迎えたものは、入院前と変わらない穏やかなわたしの寝室と、山ほどの蔵書でした。壁じゅうに備え付けられた本棚に本が一冊一冊整理され、全集なら全部揃いで順番どおり並んでいます。この点に関しては厳格だとわたしは自認しています。きちんと分類しているので、どの本がどこにあるのか、ほとんどわたしは記憶しています。ですからすぐ、『失われた時を求めて』全巻が揃った本棚に行き、お目当ての第一巻を手にベッドにもどると、ページをめくりはじめました。《頬のような枕》という比喩が出てくるのは作品の最初の方だと記憶していたのです。すみません、水をもらえますか？」

ヨランダが男に素焼きの水差しを渡した。男は骨董品を見るような目つきでその水差しを眺めたあと、それを持ち上げ、二口ほど飲んだが、そのタイプの水差しに慣れていなかったようで、水をこぼし、着ていたパジャマを濡らしてしまった。

「コップをください」と言いながら水差しを返すと、パジャマにかかった水をはらった。

その時、客がひとり書店に入ってきた。その客は店奥のコンピューター室の人だかりに、引き寄せられるように、そうっと近づいていった。

「比喩を探していたところまで話しましたよね」男は居ずまいを正すと、話を再開した。「比喩を探していたときわたしには不安が芽生え、先ほど見せてもらった二冊の小説に目を通すまで、心は恐怖で一杯でした。そのため、一番楽しいはずの退院後の翌日は悪夢のような一日になってしまったのです。しかし、わたしを取り囲むものが悪夢のように歪んで見えることはありませんでした。まちがいなくわたしは、覚醒していました。取り囲んでいるものは、たし

かにこの手で触れることができましたし、なにより目が覚めていた証拠には、外の物音がわたしには聞こえました。わたしの不安と恐怖の原因についてはこれからくわしく話しますが、夢を見ていたのではないことはこれでわかっていたでしょう。さて、本を持ってベッドにもどったわたしは、比喩を見つけようとしたのですが、見つかりませんでした。しばらくして、自分の要領の悪さにいらついたわたしは、もう一度その小説を読み直そうとしました。しかしそれは、比喩を見つけようとしたからではありません。もどかしい思いでペー지를繰っていたとき、本のなかからただならぬ気配が漂ってきたからです。その本は、わたしが記憶していた本と同じ本のように思えなかったのです。コップを、もらえますか？」

ヨランダがなにかつぶやきながら、倉庫のなかに入っていった。男は待っていた。

「なにか本をお探しですか？」とホセ・アントニオが、少し前に店に入ってきた客に尋ねた。その客は急いでいないとそれとなくわからせるように、肩をすぼめた。たぶんみんなの視線をいきなり浴びて戸惑ったのだろう。

「どうぞ、コップです」とヨランダが明るい声で言った。

ハビエルは水差しからそのコップに水を注ぐと、男にコップをわたした。男はのどを鳴らして一息に水を飲んだ。

「ありがとう」と男は言った。「のどが渇いていました。それにわたしは、腎臓結石をわずらっているので、水を大量に飲まなければならないのです。先ほど、あの本は記憶していた本と同じ本のように思えなかったと言いましたよね。同じ本とは思えませんでしたし、実際、同じ本ではありませんでした。よく見るとその本は、個人的な思い出話を集めたもので、文学的要素を欠いているだけでなく、意図的に小説に見えないよう書かれていました。ご存知のように、あの小説の最大の魅力は、もろく頼りない記憶が何度も繰り返し呼び覚まされることによって、想起された出来事が物語の現実となって展開していくという点にあります。それは、作者が技巧を凝らし、人間関係やさまざまな感情や過去に対する態度など、過ぎ去っていく事柄に新たに揺さぶりをかけているからです。しかし、そんな内容はその本から消えていました。さらに驚いたこ

とには、小説のタイトルも同じタイトルではありませんでした。プルーストの作品だと思っていたその本には、あの有名なタイトルではなく、素っ気なく『回想録』と記されていたのです。サイズや表紙のデザインや活字の大きさなどはあの本と同じものでしたし、同じ出版社から発行されていました。しかし断言できますが、そんな本はそれまで、わたしの本棚にある何百冊の蔵書のなかにはありませんでした。あわてて起き上がり、全集のほかの巻を取りに行き、新しいタイトルが付されているのを認めたとき、それまでの驚きは悪意に満ちた確証に変わりました。そこには小説らしい構想はありませんでした。その本は、ありふれた、取るに足らない陰口をささやく、世紀末フランス、ブルジョア階級のうぬぼれ屋によって作られた、退屈な年代記でした。みなさん、どう思いますか？」

今回は誰もなにも言わなかった。集中して聞いている様子から、誰もが男の話に興味をそそられているのがわかった。

「ご想像のとおり、その発見に^{きょうがく}驚愕したわたしは、蔵書を逐一調べることにしました。装丁も手ざわりもすべて知り尽くしている本のなかに、今みなさんにお話ししたような、見たこともない本が紛れ込んでいるかもしれないと思ったからです。これは現実だろうか、ぼんやりした意識のまま、子供の頃とりわけお気に入りだった小説、スティーヴンソンの『宝島』を探しました。わたしの本棚にあった『宝島』は、やはりわたしが記憶している装丁や手ざわりだったものの、耐えがたく冗漫なつまらない内容の本に変わっていました。それは16世紀から18世紀のイギリスにおける海賊の書物で、海賊の出没箇所や隠れ^が処の一覧表など、いろいろ付録がついているなかに、ジョン、またの名をシルヴァーという海賊の証言がありました。その海賊は絞首刑に服する前、^{ざんげ}懺悔の言葉を述べると、プリント何某の命令のもとで行なった身の毛もよだつ悪行の数々を語っていました。みなさん、よろしいですか。『宝島』は海賊に関する報告書になっていたのです」

男の片方の臉が引きつったように震えはじめた。チックを起こしているのだ。「もう夕方近くになっていました。それまでの幸せ気分は一転、苦悩に変わっていました。その本を棚に戻すと、恐る恐るほかの本を見ることにしました。

幼い日々、文字の世界を旅する喜びを教えてくれた本たちです。しかしそれらの本から、想像力を掻きたてる文学的な実体は消えていました。文字に真実の命を与えるかすかな震えといったものは見当たりません。先ほども言ったように、どの本も、装丁も手ざわりも以前と同じでした。ずっと昔購入して何度も読み返した本には傷やしみがあつたのですが、それもそのまま同じでした。作者も同じなら、翻訳の場合には訳者も同じ。表紙のデザイン、紙の質、組版も同じでした。ただ、内容はすべて事実の記述に終始しており、歴史学や社会学や心理学の解説書のようなものでした。みなさん、想像できますか？ ハイジもトム・ソーヤーもアントニータもハンス・プファールもアイヴァンホーもダルタニヤンもネモ船長も別人のようになり、波乱に富んだ、あのドラマティックな生き方をやめ、治安警察の取り調べ調書にあるような中身のない生ぬるい人生を生きていることが。水を、もう一杯ください」

聞いていたもののうちのひとりが水差しから、礼拝の儀式のように^{うやうや}恭しく男のコップに水を注いだ。その水を飲み干すと、男はまた話した。

「この現象について考えました。そうです。長い時間考えました。そしてとうとう、あの小説を探してみようと思いました。それは、わたしの心に安らぎを与え、際限なくわたしを夢中にさせてくれる小説です。所有しているその小説の数ある版のうち一つを、^{こわごわ}怖怖わたしは手に取りました。その本は見たところ以前と同じ本でした。しかし、タイトルが誰もが知っているあのタイトルではなく、『善人アロンソ・キハーノの生涯』に変わっており、信心深い下級貴族の模範的な人生が^{ことこま}事細かに綴られていました。16世紀末その貴族は輝かしい聖職の道を歩み、名高い狂人病院を建てたのち、立派なキリスト教徒として生涯を終えていました。その本を読んだとき、事故のあと悪夢にうなされた長い病院生活からの退院後、わたしのなかに芽生えていた安らぎは、跡形もなく消え去りました。蔵書をいくら調べても同じ衝撃を受けるだろうとわかってはいたものの、それからしばらくわたしは、一冊一冊本を開いていきました。そのため本が大地震の残骸のように床一面に散乱しました。小説と呼べる本がひとつもないのを確認したわたしは、同じように、詩の本も演劇の本もなくなっていることを知りました。文学作品と呼べるものはすべて消えていました。たし

かに、先ほどから言っているように、書物はありました。しかしそこには、想像力を掻きたてる実体はありません。すべての本を点検したわけではありませんが、本棚には文学作品とよべる本は見当たりませんでした。心を静めるため2、3時間休み、気持ちを整理しようと思いました。その時、これは夢かもしれないと思いました。しかし先ほども言ったように、わたしは夢に出てくるような、^{もや}霧のたち込めた^{うつつ}薄らとした光に包まれてはいませんでした。理性的であろうと思いつつも、わたしにはわからない理由で、わたしの本棚から文学作品はもう消えてしまったと考えるようになりました。書物がひとつの大きな^{るい}類だと考えると、文学という種は突然絶滅したのではないかと思いました。そして想像もつかないことですが、わたしは事故にあったことがきっかけで、文学の存在しない世界に放り出されたのではないか。そのような推論をしばらく重ねたあと、やがて、わたしが文学とよんでいたものは、夢や精神錯乱の産物であり、わたしの精神が巧妙なペテンにあっている状態だったのかもしれない、と思うようになりました。文学が存在しそれが書物として印刷されていると、これまでわたしは夢に見ていたのかもしれない。正確さを第一として事実をただ記述しただけの書類が、わたしの夢の中で改竄^{かいざん}され書き換えられ、小説となっていたのかもしれない。でも結局、そんなふうを考えるのはやめました。夢を見ていたとしても、夢にも限界があると思ったからです。夢のなかで小説のどれか一つぐらいは想像できるかもしれない。しかしわたしの心を満たし、記憶のなかでいつも^{さんぜん}燦然と輝きを放つ多くの文学作品を想像するのは無理な話です。夢や精神錯乱のせいでそんなことができるとは思えません。ストーリーや文体だけでなく、文学ジャンルや文学批評まで思いつかなければならないからです。それからわたしは、もし文学の存在しない世界に放り出されたとしたら、どうやって生きていったらよいらるかと考えました。わたしが今生きているこの世界では、わたしという存在の大部分は小説や詩でできあがっており、いつも文学に守られていました。文学は、法律や文化の違いや国境を越えて他者と共感し理解し合う通路となり、頑丈なシェルターとなりました。そして想像力をはたらかせることや、人間にはさまざまな感情があることをわたしたちに教えてくれました。さらに文学は、破壊的なドグマに対する盾となり、

文学のおかげで、わたしたちはちなまぐさ血腥い暴力的な現実に耐えられ、この世界にはわたしたちとは異なった現実が存在することを予感できました。みなさん、そう思いませんか？」

一瞬、イグナシオはなにか言おうとしたが、他のものたちのように沈黙を守った。男は話しつづけた。

「わたしはバルコニーに出ると、まだ薄暗い夜明けの街を眺めました。急ぎ足で歩く孤独な人影はなにかに怯おびえているように見えました。日がのぼったらわたしは、この異変の原因を解明しようと思いました。夢ならさめているでしょう。しかしもし夢でなく、わたしが今いるこの世界に文学が存在しないとしたら、わたしの記憶に残っている文学作品を、今すぐわたしの手で書き綴らなければと思いました。なぜなら、正確な意味が結局わからずに終わったブルーストのあの比喻のように、わたしがこれまで読んだ文学作品の内容は脳裏から消えかかり、おぼろげな記憶のなかにどうにかたたず佇んでいるという状態だったからです。そこでわたしは、二度と読めない文学作品の、作者の提示するテーマや形式、わたしの知るかぎりの情報を書き留めておこうと決意しました。机に座り、さまざまな物語について書いていきました。オデュッセウスの物語、ラサリーリョ・デ・トルメスの物語、ドン・キホーテの物語、レナール夫人の物語、エイハブ船長の物語、ティラン・ロ・ブランの物語、ボヴァリー夫人の物語、スノープス家の物語、エドモン・ダンテスの物語、グレゴール・ザムザの物語、ハンス・カストルプの物語、ペドロ・パラモの物語、ブラドミン侯爵の物語、しかばね屍集めのフンタの物語。夢中でわたしは書きました。が突然、絶望的な気分になりました。この企てがとんでもない難事業だとわかったからです。わたしが書き留めているものは、物語に関する解説にしかすぎません。書物が存在しないということは、物語も空虚で実体がないということなのです。その時、通りの騒音が耳につきました。町はすでに一日の活動を始めていました。わたしは書店があったのを思い出すと、家から飛び出しました。この書店でも、わたしの家と同じ、恐ろしい異変が起きているのか確かめようと思ったのです」

「この本はいつもと変わりありません」ホセ・アントニオが言った。

その日は夏の一日だった。早朝のせいもあり、客の出足は悪かった。彼らは男の語る奇妙な話を飽きもせず熱心に聞いていた。

「もう少し確かめさせてください」と男は言った。そして立ち上がると、倉庫のなかに入り、本棚を見てまわった。男は昼過ぎまで、本棚から本を抜き出しては、大きな声で読んでいた。

午後1時30分になった。昼食に出かけるので一旦店を閉める、とアルフォンソは男に声をかけた。そこで男はみんなと一緒に外に出たが、髪の毛が寝起きのままのパジャマ姿の男は、怪しげであると同時に哀れさを催させた。

「家に帰りたくありません」と弱々しい声で男は言った。「本を見るのが怖いのです」

「ついていってあげましょう」とヘスは言った。「心配いりません」

昼食を終え、みんなは書店にもどってくると、ヘスに、男はどうだったかと尋ねた。

「自分の家はケベードやボッケリーニが住んだ家だと言っていたよ」とヘスは言った。「中庭はゴミ捨て場のようだった。本のことだけれど、男が言うほどたくさんはなかった。部屋にはそれぞれ棚はあったけれど。たしかにガラス戸のついた木製の古い本棚が3つあった。『ドン・キホーテ』やブルーストやいろんな小説が並んでいた。ともかく男は、完全に平静を取り戻していた。なにしろ小説は、またもとどおりの小説だったのだから。何事も聞くだけでなく、見てみなければならぬものだね」

解説

本作『空虚な書物』はホセ・マリア・メリーノによるディストピア（暗黒郷）が描かれた幻想的な物語といえるだろう。そこではわたしたち人類を守るシェルターとなる書物が消滅しているからである。ここでの書物とは、想像力を掻きたてる本、つまり小説や詩や演劇などの文学作品である。

ひどく暑い夏の早朝、パジャマ姿の没落貴族が大声をあげながら書店に飛び込んでくる。人づきあいを好まないこの男は紳士的な態度で本を買っていく常連客だが、この朝は明らかに普段と様子が違う。事故で3カ月の入院生活をしたあと、退院した翌日、男の身に奇妙な事件が起こった。それは男の所蔵する書物から文学的実体が抜け落ちるといったものだった。感動を与えていた文学作品はすべて、事実を記述しただけの空虚な書物と化した。文学の存在しない世界に恐怖を感じた男は消滅した物語を書き残そうとする。しかし途中で、作品が存在しないということは、いくら情報を書き留めても、その書物は空虚だと思いつくのである。

四方田犬彦は『人間を守る読書』（文藝春秋、2007）で「書物は情報の束ではないのです」「何かを他の人に向かって話しかけようとする声書物なのであって、無機的に情報がずらっと並んでいるものではない」と言う。書物を読むのはただ情報を集めるためではない。では何のためか？ 四方田はこうつづける。「書物を読むということは現実の体験なのです」。それは作者の声を想像し、積極的に聞こうとするからだと言っている。また、荒川洋治も『文学は実学である』（みすず書房、2020）で、文学のはたらきとは、「才覚に恵まれた人が鮮やかな文や鋭いことばを駆使して、ほんとうの現実を開示してみせる」ことだと述べている。

本作でも、3カ月ぶりに自宅に戻った男は《頬のような枕》というブルーストの小説の一節を思い出すことで、身のまわりの現実世界を認識し、日常に戻ってくる。また男は、幼い頃ジークフリートの物語を読んで、現実世界に生きる人間の宿命をすでに予感した。

最近、文学の存在意義がわからないというひとが増えているように思われ

る。それは文学を、現実とはまったく別で無関係な絵空事と考えるからだと思われる。しかし、絵空事と思えるような、その世界に沈潜することで、反対に、現実世界を深く知ることができるのだ。つまり、文学を読むということは、現実を体験することなのである。

どうしてこのような逆説的な現象が生じるのだろうか？ それはわたしたちの目に見える世界だけが現実世界ではないからだ。文学という虚構世界は肉眼では見えない現実世界を開示する。そして、その世界を人間の精神や身体のなかに取り込むことで、人間は形成され成長していく。文学に育まれた人間は、文学をとおして現実世界を知り、そこに立ち向かっていけるのである。既出の荒川は、文学は、「読む人の現実を、生活を一変させるのだ」「それくらいの激しい力が文学にはある」と言う。

メリーノも同様の考えを抱いていると思われる。なぜなら、主人公の没落貴族の男にこう言わせているからだ。「わたしが今生きているこの世界では、わたしという存在の大部分は小説や詩でできあがっており、いつも文学に守られていました。文学は、法律や文化の違いや国境を越えて他者と共感し理解し合う通路となり、頑丈なシェルターとなりました。そして想像力をはたらかせることや、人間にはさまざまな感情があることをわたしたちに教えてくれました。さらに文学は、破壊的なドグマに対する盾となり、文学のおかげで、わたしたちは血^{ちなまぐさ}腥い暴力的な現実^{じじ}に耐えられ、この世界にはわたしたちとは異なった現実が存在することを予感できました」

書物が事実の記述に終始し、想像力を掻きたてる文学的実体を失ったとき、人間は現実を実感できなくなり、暴力と汚辱にまみれた現実世界へ丸裸で放り出されて、荒涼としたその世界を生きなくてはならない。

筆者が以前訳したメリーノの作品『この世の言葉』（『琉球大学欧米文化論集』第64号、2020）で、メリーノは、言語はたんにコミュニケーションのツールではなく人間そのものだと訴えていた。本作においては、言語を用いて構築されている文学は、もうひとつの現実世界であると提示している。その世界が存在するからこそ、人間は守られ、安心して生きていける。そのため、無機的な情報しか得られない、事実を記述しただけの空虚な書物しか存在しなくな

ったとき、その世界はディストピアとなるのである。その索漠とした世界では、「孤独な人影はなにかに怯えている」のである。

このような考えをメリーノは声高に訴えるわけではない。本作において一見奇矯に見える男の発言をとおして、人間にとっての文学の重要性を、文学作品として示しているのである。

さらに、本作に本当らしさを与えるため、荒唐無稽としか思えないことを男が語る原因をさりげなく示すこともメリーノは忘れてはいない。男の生活する環境や状況、男の性格に原因があるかもしれないとメリーノはほのめかしている。寝苦しい夜が続いている暑い夏に退院したばかりだという肉体的不調要因、没落した貴族であり屋敷の中庭はゴミ捨て場のようにになっているという経済的不安定要因、腎臓結石をわずらい、また興奮して話すとかックを起こすという病的要因、さらには人付き合いを避ける性格などである。

そのため男の語る異変は、実際に起こったことなのか、男の妄想なのか、判然としない。男は自分が体験していることは夢ではないかと何度も疑うが、それを打ち消すことで、自分の見たことの真実性を強く主張している。最後に男の家に行き本棚を見たヘスは「小説は、元どおりの小説だった」と言う。異変は実際に起こり、元に戻っていたということなのだろうか。それとも、男の語ったことは男のまったくの妄言だったのだろうか。

注目に値するのは、本作品が次の一文で唐突に終わっていることだ。「何事も聞くだけでなく、見てみなければならないものだね」

一見、ヘスの発するこの台詞は、男は妄言を言っていたと断定しているようにもみえる。しかしこれは、本棚に納まったままの書物は、そこに置いておいたり、それについて聞いたりするだけでなく、手に取って読まなければ意味はない、というメリーノのメッセージではないだろうか。現代人は、才覚に恵まれたひとが創造した数多くの文学作品を目の前にしながら、その宝の山を享受しなくなっている。読まれない書物は存在しないと同然であり、とすれば現代社会はすでにディストピアへの道を歩みはじめているのではないかとメリーノは示唆しているのだ。

男の話すことを妄言だと決めつけて等閑視していいのだろうか？ メリー

ノは読者にそう問いかけているように思われる。

さて、『空虚な書物』には多くの古今の文学作品名が登場する。どれもが有名であるが、念のため、本作に記されている作品や登場人物などについて一言説明しておきたい。

『失われた時を求めて』(1913-27)はマルセル・プルーストによる全7巻の長編小説。『ドン・キホーテ正編、続編』(1605,15)はミゲル・デ・セルバンテスの著作である。『子供のための黄金の書』とは1946年メキシコで刊行された全6巻の子供用の百科事典。スペインからの亡命者ベンハミン・ハルネスとルイス・ドポルトが編纂した。『ユニベルシタス』は全20巻から成るサルバット社刊の百科事典。ジークフリートはドイツ英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』(12世紀頃)の前編の主人公。ロバート・ルイス・ステューヴンソン『宝島』は1883年出版の冒険小説である。ハイジはヨハンナ・シュピーリ『ハイジ』(1880)の主人公。トム・ソーヤーはマーク・トゥエイン『トム・ソーヤーの冒険』(1876)の主人公。アントニータはスペインのボニータ・カサス作の児童文学『可愛い少女アントニータ』の主人公だと思われる。ハンス・プファールはエドガー・アラン・ポー『ハンス・プファールの無類の冒険』(1835)の主人公。アイヴァンホーはスコットランドの作家ウォルター・スコット『アイヴァンホー』(1819)の主人公。また、ダルタニャンはアレクサンドル・デュマ『三銃士』を含むダルタニャン物語シリーズ三部作(1844-48)の主人公である。そして、ネモ船長はジュール・ヴェルヌ『海底二万里』(1870)の登場人物。オデュッセウスはギリシア神話の英雄で、ホメーロス『オデュッセイア』(紀元前800頃)の主人公。ラサリーリョ・デ・トルメスは、スペインの小説で文学史上最初のピカレスク・ロマン『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』(1554)の主人公。レナル夫人はスタンダール『赤と黒』(1830)で主人公ジュリアン・ソレルが愛する人妻である。さらに、エイハブ船長はハーマン・メルヴィル『白鯨』(1851)の主人公。ティラン・ロ・ブランはカタルーニャ文学を代表する騎士道物語、ジュアノット・マルトゥレイ『ティラン・ロ・ブラン』(1490)の主人公の騎士。エドモン・ダンテスはアレクサンドル・デュマ『モンテ・ク

リスト伯』(1845-46)の主人公であり、日本では巖窟王で馴染みが深い。スノーブス家とは、ウィリアム・フォークナー『村』(1940)、『町』(1957)、『館』(1959)の三部作における主人公の一族。グレゴール・ザムザはフランツ・カフカ『変身』(1916)の主人公。ハンス・カストルプはトーマス・マン『魔の山』(1924)の主人公。ペドロ・パラモはイスパノアメリカ文学を代表する、メキシコの小説ファン・ルルフォ『ペドロ・パラモ』(1955)の主人公である。ブラドミン侯爵はスペインの作家バリェ・インクラン作ソナタシリーズ四部作(1902-5)の主人公。屍集めのフンタとはウルグアイの作家ファン・カルロス・オネッティ『屍集めのフンタ』(1964)の主人公である。そして、ケベードとはスペイン文学史において黄金世紀と呼ばれる17世紀を代表する詩人でもあり作家でもあるフランシスコ・ケベード(1580-1645)のこと。ボッケリーニとはイタリア人の作曲家でチェロ奏者でも有名なルイジ・ボッケリーニ(1743-1805)のことである。フランシスコ・ケベードと、若い頃からスペインに暮らしていたルイジ・ボッケリーニは、マドリードのマデーラ通りの同じ番地に屋敷を構えていたといわれる。

これら『空虚な書物』に登場する文学作品はメリーノの読書リストのほんの一部である。メリーノは *Ficción perpetua*, Menoscuarto Ediciones, 2014 で読書歴を披歴している。

メリーノの青少年時代は、キリスト教会が社会生活だけでなく精神生活をも抑圧していた時代だったため、教師から、信仰心を促す書物しか読むことが認められず、*novelas*(小説)は悪徳を教えるものだから *No verlas*(それらを読むべからず)と言われていた、とメリーノは同書で語っている。しかし、理解ある父親や、そのような時代には珍しく読書好きだった今は亡き親友がそばにいたおかげで、競うように片っ端から本を読んだ、と当時をなつかしく思い出している。

Ficción perpetua を参照しながら、彼が幼い頃から愛読し、創作するうえで彼に影響を与えた作品について見ていきたい。

Ficción perpetua のなかでメリーノは、ロビンソン・クルーソーが難破した

船から生きるうえで必要不可欠なものを取り出した例にならい、沈んでいく船に蔵書が積まれていたらどんな本を救うか、10日間1冊ずつ運び出すとして、一日ごとに本のテーマを決め多くの本を紹介しながら、10冊ほどを選んでいる。

1日目は事典や辞書の類を救出している。これらの書籍の助けがあつてこそ読書が楽しめるからだと言ふ。『子供のための黄金の書』など多くの事典や辞書の名があがったあと、運び出されたのは『ウニベルシタス』。これは1冊ではなく、前述のとおり20巻セットの百科事典である。2日目は幼年時代の愛読書というテーマのもと、漫画で描かれている昔話や神話、『ロビンソン・クルーソー』(1719)があげられたあと、『ハイジ』が選ばれている。3日目は『ドン・キホーテ』。4日目は詩の本。ベッケル、ロサリオ・デ・カストロ、ヒメネス、ロルカ、ルベン・ダリオなどの詩人たちの名をメリーノはあげている。1冊には絞りきれず、選んだのは次の2冊である。1冊は11世紀から12世紀にかけてのペルシアの詩人オマル・ハイヤーム『ルバイヤート』であり、もう一冊は2006年セルバンテス賞(スペイン語圏でもっとも権威ある文学賞)を受賞したアントニオ・ガモネダ作の*Arden las pérdidas*(『アントニオ・ガモネダ詩集』(現代企画室、2013)中で「消失が燃える」というタイトルで日本語訳されている)である。5日目は短編小説。『千一夜物語』にふれたあと、バリエ・イン克蘭、クラリン、ポー、チャーホフ、ヘミングウェイ、カーヴァー、ラヴクラフト、ボルヘス、それからマックス・アウブ、カルメン・ラフォレット、アナ・マリア・マトゥーテなどのスペイン市民戦争の戦後作家をメリーノは羅列するが、最終的に選んだ本はモーパッサン『脂肪の塊』(1880)である。6日目はミゲル・デ・ウナムーノ『霧』(1914)。青年期に初めて読み、文学は因習から人間を解放し、人生にとって欠かせない存在だと教えてくれた本であり、その後、小説を書くときに核となった自分にとっては決定的な作品だと、メリーノはこの作品に重要な意味を与えている。7日目は長編小説というテーマで、スタンダール、フォークナー、ジョイス、カフカなどの名が並んだあと、選ばれたのはスタンダール『赤と黒』である。8日目は大学生のとき夢中になって読んだ文学作品のなかから、サルトル、カミュ、ガ

ルシア・マルケスなどを抑え、トーマス・マン『魔の山』が選ばれている。近代文学は『ドン・キホーテ』に始まり『魔の山』で終焉を迎えたとメリーノは考えている。9日目はエンターテイメント系からSF小説にメリーノは注目している。彼は若い頃SF小説の熱烈な読者だった。当時スペインでは、SF小説はファンタジックで荒唐無稽な話という偏見にさらされ軽視されていた。その一方で、カフカやコルタサルやスペイン20世紀の幻想的作風の作家アルバロ・クンケイロなどが高く評価されていた矛盾にメリーノは驚きを隠しきれない。ウェルズやジュール・ヴェルヌから始めてアイザック・アシモフやレイ・ブラッドベリー(焚書が立法化された未来社会を描く彼の『華氏451度』(1953)は『空虚な書物』に強い影響を与えていると考えられる。上述の『人間を守る読書』でも四方田は同書にふれている)などのSF小説を読んでいたメリーノが選んだのは、フレドリック・ブラウン『さあ、気ちがいになりなさい』(1949)と『地獄のハネムーン』(1950)。そして10日目。70年代にユネスコとの共同事業のため初めて訪れたイスマノアメリカでの体験がこの未知の大陸への興味を掻きたてた、とメリーノは言う。最終日の10日目メリーノは、アメリカ大陸やその風物や文化と遭遇したスペイン人によって記録された多くの文献のうちの1冊、ベルナル・ディアス・デル・カスティージョ『メキシコ征服記』を選んでいる。

以上が10日間をかけて選ばれた書物である。

*Ficción perpetua*にはここでは言及しなかった本が数多く記されている。メリーノが希代の読書家であるのはまちがいない。『空虚な書物』とは、作家であると同時に愛書家でもあるメリーノの、文学に対しての考えや思いがあらわされた作品といえるだろう。

最後にメリーノの略歴を紹介しておく。ホセ・マリア・メリーノは、1941年スペイン北西部の自治州ガリシアの港町ア・コルーニャに生まれ、幼い頃、隣接する州カスティージョ・イ・レオンの古都レオンに移り住んだ。(そのため、彼の作品の舞台はレオンか、現在の住まいのある首都マドリードであることが多い。本作はマデーラ通りという地名からマドリードが舞台になっている

ことがわかる)

マドリードで法学を学んだのち、彼は1972年詩人としてデビューしたが、*Novela de Andrés Choz* (1976) 以来、小説家として多数の作品を発表している。*La orilla oscura*(1985)、*El centro del aire*(1991)、*Las visiones de Lucrecia* (1996)、*Los invisibles*(2000)、*El heredero*(2003)、*La sima*(2009)、*Musa Décima*(2016) などである。ミゲル・デリーベス文学賞 (1996) やラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ文学賞 (2004) など受賞した文学賞は数多い。2008年、スペイン王立アカデミーの会員に選出された。さらに2013年、*El río del Edén*(2012) で国民文学賞を受賞した。そして2021年、作家たちの権利や発展を守る活動に対し、CEDRO 賞がメリーノに送られた。(CEDRO は Centro Español de Derechos Reprográficos の略語)

ここに訳出したのは、José María Merino, *El anillo judío y otros cuentos*, Castilla Ediciones, Valladolid, 2005 所収の短編13編中の1編“Los libros vacíos”である。